

## 栗ヶ沢バプテスト教会 26-02-15 伝道開始記念礼拝説教

### 「伝道開始 57 年」使徒言行録 18:5-10

木村一充牧師

私たちの栗ヶ沢教会は、この 2 月で、伝道開始 57 周年を迎えます。本日はそのことを記念してささげる伝道開始記念礼拝となります。先ほどのスライドショーにも登場していましたが、私は当教会の草創期のメンバーであった蓑原善和さんに、昨年の 2 月、福岡で会ってきました。そうして、今から 57 年前の栗ヶ沢教会の始まりがどのようであったかをうかがってきました。1969 年当時、この小金原地区は山を切り崩して宅地とする宅地造成工事が始められており、この辺で一番先に建った建物が、私たちの教会でした。ですから、この当時千葉銀行の西側の坂から北の方角を見ると、教会が立っているのが見えたと言います。まだ辺りに住宅はなく、住民も少なかったため、たぬきに伝道するつもりかと当時のバプテスト連盟の総主事は言われたそうです。しかし、年月の経過とともに 1 軒、また 1 軒と住宅が建てられ、今では松戸市でも有数の落ち着いた住宅地と見られるようになりました。

先ほどのスライドの最初の方で、日曜学校で子どもたちの前に立つ蓑原さんの姿がありました。蓑原さんは東京生まれの方ですが、大学は九州大学に進まれ、農学部の大学院を卒業したあと、就職して柏市にある研究所で働くことになります。神さまから、「お前は献身して牧師にならないのか」という問いかけを何度も聞いたそうですが、ずっと「勘弁してください」と断ってきたとおっしゃっていました。都内から柏市までの通勤は大変ということで、当時入居が始まっていた光ヶ丘団地に引っ越すことになり、そこで知り合いの夫婦が始めていた日曜子ども会の集会を引き継ぐことになりました。公団住宅だったにもかかわらず、集会所で日曜学校として子どもたちの面倒をみることを、団地の住民の方は目をつぶってくれたといいます。そこで、蓑原さんは午前中に子どもたちを対象にした日曜学校、午後に大人たちによる主日礼拝をささげました。礼拝の場所は、次いで光ヶ丘団地から洋裁教室の 2 階に移りましたが、やがて富平さんの庭にプレハブの建物を立て、そこを礼拝の場所としました。昨年の春、富平さんのお嬢さんとカトリック松戸教会の朝祷会でお会いし、昔の写真をお見せすると、「蓑原のおじちゃんの写真だ」と大変懐かしがってくださいました。

「来年の記念礼拝では、ぜひ教会にお越しいただいて、当時の思い出話を語ってください」とお願いしたのですが、丁重なお断りのお便りを頂いたのは残念なことでした。

1969 年「光ヶ丘伝道所」は連盟直属の伝道所として公認されることになり、市川教会が母体となります。翌 1970 年 2 月、鍛治田武牧師が派遣されます。明るく元気な先生のもとで主日の礼拝がささげられ、教会の教勢も伸び、その年の 8 月に現在の場所に、最初の教会堂が建設されました。最初の会堂は（今から見れば、旧会堂であります）屋根に十字架がそびえる白い建物で、いかにも教会らしい建物がありました。

初代牧師鍛治田武先生は、恰幅のよい明るく元気な先生でした。根木内小学校にお子さんを通わせる中で、ご自身も PTA の会長となられ、地域とのつながりを深められました。昨年福岡に行った時、2 代目牧師の松見俊先生にお会いしましたが、松見先生によると鍛治田先生はデパ地下巡りが好きだったそうです。みなさん、デパートの地下に何が売られているかご存じですね。少し高級な食料品が売られています。その食品や食材を見て回るのがお好きだったそうです。実際、鍛治田先生ご自身も料理が好きで、先生から手料理をふるまわれた方もこの中にはいらっしゃるかもしれません。さらに鍛治田みどり夫人も地域の方々との交流会を開いて機会あるごとに参加さ

れました。造成直後的小金原団地は、下水も完備していなかったため、大雨が降ると、前の道路が冠水しプール状態になったそうです。そこで、北から坂道をおりてきた車が水浸しにならないよう、鍛治田先生は裸になって、道路の中に立ち、坂道から降りて来ないように手を上げて運転手を静止したといいます。1970年代の教会は、このように少しずつ開発が進む新興住宅地の拡大とともに、この地域に根付いてゆきました。このような信仰の先達の働きがあって、今があるのだと思います。その後、栗ヶ沢教会は1974年4月に教会組織会議を開き、独自の信仰告白と教会規則・細則をもつ教会となります。教会として独り立ちをしたということです。初代鍛治田牧師のあと、2代目松見俊牧師、3代目川上敏夫牧師、4代目吉高叶牧師、5代目山田幸男牧師、6代目村上千代牧師、そして7代目に木村が教会から招聘され、牧師としてのつとめを担ってまいりました。1969年というと私はまだ小学生です。今のような便利な時代ではありませんでした。道路の舗装さえも、十分に進んでいなかったと記憶しています。そのような時代に、教会は、この地で伝道をスタートし、以来福音宣教の働きを続けてきました。

本日お読みいただいた使徒言行録18章では、パウロがコリントの町で開拓伝道を始めた時の様子が描かれています。コリントは当時人口60万人を擁するギリシャ最大の都市でした。しかし、そのコリントの町のユダヤ人の会堂で「イエスこそメシアである」と力強く宣べ伝えたところ、ユダヤ人たちから強い反発を受け、会堂での宣教ができなくなつたことが書き記されています。会堂で福音を語れなくなつたあと、どこでキリストを伝えたのか。信徒の家でみ言葉を語ったのです。7節の「神をあがめるテテオ・ユストという人」とはギリシャ名をもつ異邦人であります。しかも、この人の家は会堂の隣にありました。すると、そのパウロの宣教を聞いて会堂長のクリスピという人が、一家をあげて主を信じるようになったというのです。当教会で例えると、すぐお隣の家で日曜ごとに礼拝が捧げられるようになり、パウロがそこで救いの言葉を語り告げるようになると、何と信徒代表者の家族が全員隣の集会の信徒となって、パウロの伝道を支えたというのです。こうして始まったコリント教会は、多くの困難な問題を抱えながらも、パウロの異邦人伝道（第2回、3回）において、もっとも規模の大きな教会として実を結ぶことになったのです。ある夜のこと、パウロは幻の中で主の言葉を聞きます。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。…この町には、わたしの民が大勢いるからだ」

この言葉は、私たちの教会にも当てはまります。栗ヶ沢教会が立っているこの町にも主の民が大勢います。そのことを信じて私たちは福音を語り続けます。伝道開始から57年を迎えて、わが国も世界もこれまでになかったような大きな変化の中にあります。そのような揺れ動く社会の中で、変わらないもの、真実であるものである神の言葉を教会は語り続けてゆくのです。

お祈りいたします。